DDS 研究が 主役となる時代がやって来た

日本 DDS 学会
Drug Delivery System 編集委員長

武田真莉子*

神戸学院大学薬学部
薬物送達システム学研究室

明けましておめでとうございます。

昨年7月に開催されました理事会において本誌編集委員会委員の新旧交代が承認され、新しい委員会体制がスタートいたしました。このたびの交代にあたり、武田が編集委員長を仰せつかることになり、重要な責務を拝受して、身の引き締まる思いで新年を迎えております。編集委員会の新しい顔ぶれについては本誌最後のページをどうぞご覧ください。

振り返りますと、武田は第13回編集委員会(2003年9月開催)のときに編集委員に加わりましたが、当時は岡野光夫先生が編集委員長で、加藤哲郎先生、河野茂先生、橋田充先生、真弓忠範先生、山口俊晴先生が委員に入っておられました。その後、2011年より高倉喜信先生が編集委員長にご就任され、2世代にわたる編集委員長のもとで、実に長く編集業務を学ばせていただきました。微力ではございますが、これまでの経験を活かし、この重責を果たしていきたいと考えております。

現代は、有機合成化学を基盤とした新薬開発率の伸びに陰りが見られており、グローバルの医薬品開発戦略は低分子医薬を中心としたブロックバスターから、ペプチド・タンパク質・抗体・核酸医薬などのバイオ医薬へとパラダイムシフトが起きています。バイオ薬物は「薬」としては物理化学的特性に難点が多く、生体に効率よく吸収させるためには、DDSの貢献が必要不可欠です。その意味においては、まさに“DDS研究が主役となる

時代が来た”と言えるのではないのでしょうか。例えば、バイオ薬物の経口製剤化は最も難しい課題ではありますが、革新的DDS技術により、GLP1やインスリンの経口製剤開発の実現が現実味を帯びてきました。また、注射剤形においてもより高度な分子修飾により、多彩な超速効および超持続型製剤が次々に誕生しています。DDS基礎研究がこれまでの長い間に培ってきた知識と高い技術により、今後もますます革新的で有用性の高いDDSを医療現場に提供できるものと確信しています。

さて、本誌では従来通り、DDS研究に関する有益な情報をいち早く提供して、会員の皆様の研究活動の一助となるよう、内容の充実に努めて参りたいと存じます。本年第1号は、例年通り、今年の学術集会大会長の奥直人先生がコーディネーターを務められ、核酸医薬デリバリーの基礎から開発にいたるまでをカバーしてくださっております。本号により、7月の学術集会「DDSが創る健康長寿社会」に向けての基礎知識がしっかり得られるものと期待しております。

なお、本年より本誌の表紙デザインを一新させていただきました。DDSの学問を拓いてくださった先達の先生方の伝統を守りながらも、表紙の色のように明るく未来志向の機関誌「Drug Delivery System」に育てていきたいと存じます。会員の先生方のお力添えをよりいっそう賜いますよう、何卒よろしく御願い申し上げます。

本年もどうぞよろしく御願い申し上げます。

*Mariko Takeda : The era when a DDS study takes center stage has come
Laboratory of Drug Delivery Systems Faculty of Pharmaceutical Sciences Kobe Gakuin University